

共に学び続ける 仲間たちへ

最良の学びの場を準備し 生徒が選ぶように導く

学び続ける生徒をどのようにして育てるのか。この問いには、きつと教師一人ひとりがそれぞれの答えを持っていくことでしょう。では、私が自分の経験から答えるとしたら——それは「自ら学び、成果をつかむ体験を生徒に積ませる」です。

かつて部活動が盛んな高校に勤務した時、引退した3年生を支援するために、放課後と週末に入退室自由の自習用教室を設けました。仲間と一緒に勉強できるので怠けずに行けるし、教師が常駐しているので気軽に質問できると、生徒に好評でし

学びの感動を味わわせるために まず教師自身が学び続ける

愛媛県立松山東高校 教頭 大内洋一郎

学び続ける生徒を育てるために、一人の職業人として教師自身が学び続けなければならぬ——。さまざまな高校で学校改革に立ち会ってきた、愛媛県立松山東高校の大内洋一郎教頭が生徒と教師の学びを語る。

た。部活動に傾けてきたエネルギーを学習に向かわせるちよつとした手伝いを始めただけですが、その学年は過去にない合格実績を上げました。

難関大に多くの合格者が輩出する高校に勤務した時は、限られた時間で最大の効果を上げられるように、良問を集めたプリントを作り続けました。数多くの教科を学習しなければならぬ生徒に、問題集を薦めるだけではなく、授業の進度、難易度に合った問題を精選し、提供しなかったのです。ただし、活用するかどうかは生徒の自由。職員室前の廊下に何十枚も並べておき、学習したい生徒が自分のペースで好きなだけ持ち帰れるようにしました。

どちらのケースにも言えるのは、「教師は機会をつくるが、それを選ぶかどうかは生徒に任せる」というスタンスです。とはいえ、その機会には生徒にとって魅力的なものでなければなりません。例えば、プリントも問題集をコピーしただけのものなら、生徒は手にしなかったかもしれない。自分たちのことを一番知っている教師が手作りしたプリントだからこそ、「信じてみよう」と生徒は持ち帰ったのだと思います。

教師を、学校を信じて「やってみよう」と決意した瞬間、生徒の自発的な学びが始まります。最初から生徒任せにして「やりなさい」と指示するだけでなく、生徒に「やってみよう」と思わせるまでとことん手を掛けることが大切だと思うのです。

教師から与えられた学習ではなく、自分で切り開いてきたと納得できる学びで志望校に合格する。だからこそ、大学進学後も学び続けることが出来る。このような経験を積んだ生徒は、社会に出てもそれぞれの分野で生き生きと活躍しています。私は同窓会で教え子たちに再会する度に、それは間違いなことだと確信しています。

教師の勉強不足で 生徒の将来を狭めてよいのか

「やってみよう」と思えるまで生徒に手を掛けるのは、教師にとって

は手が掛かることであり、そこには情熱が欠かせません。そして、生徒は教師の振る舞いから情熱の有無を敏感に察知します。教材研究にしっかりと取り組んでいるか、大学・学部に興味・関心を持っているかなど、とてもよく見えています。もしかすると、当の教師だけが、自分がどれほど生徒から厳しく評価されているのかに気付いていないのかもしれない。事実、私は進路指導部に所属していた時、生徒から「A先生がレベルの低い授業しかしてくれない」「B先生のように厳しく指導してほしい



おおうち・よういちろう◎愛媛県立松山南高校、愛媛県立今治西高校、愛媛県立松山北高校などに勤務。進路指導で中心的役割を担う。2009年度から愛媛県立上浮穴高校教頭。11年度から松山東高校教頭。担当教科は数学。

い」と直訴されたことがあります。もちろん教師といえども、いろいろな失敗をすることがあります。私は20代で3年生を受け持った時、生徒の1人にこんなことを言われました。「隣のクラスの子と同じ大学を志望していたのに、その子は担任から勧められてその大学に推薦で合格した。なぜ先生は私にも勧めてくれなかったのか」。未熟だった私は、推薦入試の情報を把握しておらず、生徒の受験機会を奪ってしまったのです。

では経験もスキルも違います。では、担任の経験やスキルによって、生徒は当たり前外れを我慢しなければいけないのか。そう自分に問いかけた時、私はどきっとしました。たとえ経験が浅い若手であっても、進学や就職という人生を大きく左右することに關して、生徒の選択の幅を狭めてしまうことなど、教師である限り、プロとして許されるはずがないのです。

この失敗を機に、私は必死で勉強するようにになりました。夜、布団の中で全国の大学・学部の入試科目や配点を眺めて「この入試科目なら、どの生徒が一番力を発揮できるだろうか」と考えながら眠りました。いわば教師としての学びのスタートでした。

1人の職業人として、教師は日々勉強しなければなりません。このことに異を唱える人はいないはずですが、しかし今、世の中全体で「自分のことは自分自身で決めるべきだ」という考えが強まるあまりに、子どもたちまでもほったらかしにしようとしている、そんな雰囲気を感じること

があります。

はっきり言えば、私は高校生が「自分の力だけで」自己決定することなど出来るわけがないと思っただけです。大人がいろいろな情報や選択肢を提示しながら、生徒の自己決定を促す必要がある。それをせずに「自分で決めなさい」と言うのは、生徒とのかかわりを拒否し、ただ大人が楽をしようとしているだけです。

生徒は手を掛けすぎても、手を離しすぎても伸びません。生徒の自立を緻密な計算で導く必要がある。その絶妙なバランスを取れるようになるために、教師は常に学び続けなければならぬのです。

極端に言えば、教師という仕事は、生徒の志望を実現してもしくなくとも給料は変わりません。では、何を動機に私たちは学び続けるのでしょうか。何かをやり遂げた時の生徒の笑顔が見たいからですか。人は、払った努力が大きいほど、報われた時に大きな喜びを得ます。だからこそ、生徒も教師も学び続けるのではないのでしょうか。

*プロフィールは2012年3月時点のものです